



トラウム映画公社



かんべむさし



トラウム映画公社

かんべむさし

白 水 社

著者略歴

一九四八年石川生

関西学院大学社会学部卒

主要著書

「大江戸馬鹿草子」

「笑い宇宙の旅芸人」

「孤島黙示録」

「太平放送24時」他

物語の王国
トラウム映画公社

一九八九年一月一〇日印刷
一九八九年二月二七日発行

著者 © かんべむさし

発行者 高橋孝

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部〇三(三九)七八一一

編集部〇三(三九)七八二一

振替東京九一三三三二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04553-4
Printed in JAPAN

トラウム映画公社

装
幀
司
修

目次

第一章	狀況	5
第二章	回想	37
第三章	兆候	69
第四章	滞留	115
第五章	衰亡	197

第一章 状況

1

無論当然のことながら、意識が明確になったのは、次第ではなく、突然にだった。気がつくとき広い道路の真中に立っており、それは「過去」の「郊外」らしいのである。なぜそれがわかったかといえば、一瞬で次のようなことが確認できていたからだ。

すなわち、舗装されたその道路の前方彼方は行き止まりであり、そこにくすんだ黄土色のビルが、視座が低いゆえに若干仰角がかかって見えている。中央部のみ五階建

てでその両翼は四階なのだが、高さよりは長大な正面像で来訪者を威圧せんとするもののごとく、外壁煉瓦と窓ガラスの城壁を左右に重々しく伸ばして、そびえている。

頑丈な構造が旧時代風の印象を与え、規則的に並んだ無数の窓の小ささも、必ずい
まが現代ではないことの証拠に思えた。

そして、さらにその両側には何もなく、そればかりか扇形をなす視野全体のなかに、遠にせよ近にせよ、それ以外のビルもなく家屋もなく、樹木もなければ丘もない。無彩の空の下に平坦な地がくすんで広がり、その両者は遠景において溶融しているの
であって、手前のビルディングだけが、画然かつ傲然とした姿で存在しているのだった。

「過去の郊外の、ビルディングか……」

了解し、けれども時代や地名は判然とせぬままにつぶやいて、するとその古めかしい発音が刺激となったのか、脳細胞はこういうことを思い出していた。

「そうだ。俺はこの世界において、現在ただいま二十代の後半なのであって、あのビルディングに勤めている人間だったのだ」

ならば、もっか自分は出勤する途中なのであり、ということは、こんな所に立つて

いてはいけないのだということにもなる。

「急ごう。なぜなら、過去から現在まで、俺は仕事においては良好な評価を受けてきており、その実績を遅刻などで傷つけるのは、未来のために良くはないと思えるのだから」

ゆえに、意志がそのまま行為となるこの世界の律に従い、自分は即刻ビルの正面玄関前に達して、何段かの石段をあがっていた。

二階分の高さを持って、その部分のみ前面に張り出している構造体。左右には太い石柱が並んで屋根と権威とを支えんとしており、奥には、中央に回転式、両側に片開きのドアがあつて、それぞれにはめ込まれた一枚ガラスが冷厳な色を示している。そしてその右の隅には、暗緑色の制服をつけた老門衛が、背筋を伸ばして立っている。

「おはよう」

何気なく声をかけると、制帽の下から白髪をのぞかせた鷺鼻の彼は、碧眼を細くして、不審気に言葉を返してきた。

「いまは、すでに午後なのですが」

「それでは、僕は遅刻したのかね」

驚いて発した質問に、相手はこたえた。

「そうではありません。職務区分が異なっておりますので、本来なら私の関与すべきことではないのですが、お尋ねゆえ説明をいたします。あなたは本日の午前中、街頭撮影の認可折衝のため、首都保安局へ行っておられました。その訪問予定は昨日決まり、所属部門の長も、それを許可されていたはずです」

「そうだったかな」

記憶にはなかったが、説明されればその通りであったかに思えてきた。だが、街頭撮影というのは、何のことなのだろう。

「ロケということかね」

老門衛は、直立したまま言った。

「私はその言葉を知りません。しかし、無論あなたが、略称や通称や、各国製の用語などをお使いになるのは自由なのです。ということは、この世界の特性上、周囲の人間もおのずとそれらの言葉を使い始めるはずで、その最初の影響がたったいま私に

及びました。そうです、ロケのことです」

「なるほど。ロケの許可をね」

自分は納得し、ならばと問いを重ねた。

「ここは映画の会社で、僕はそこに勤めているのだと、こういうことになるかね」

「会社ではありません。公社です」

「映画公社。そんな組織があったかね」

「あったのではなく、あなたが御自分でおつくりになったのです。ついさきほど、さらなる過去にまで遡って」

すなわちと、彼は断言した。

「あなたは刻々この世界における環境を、虚構的旧時代という雰囲気のもとに構築しつつある。登場人物も、それに合わせて順に用意されていくのです」

「恣意的ということかね」

「さて、それは」

門衛はまばたきをし、そこで自分は、とりあえず会話を終えて建物内に入ろうとし

た。

「いずれにせよ、その環境のなかで働いてきたし、いまも働いているというわけなのだな。そして将来もということか」

だが、回転ドアに手をかけた途端、相手は声を厳しくして言った。

「お待ち下さい。慣例によれば、そこから入れるのは管理機構における部長職以上、撮影所機構においては各部監督級以上の方となっております。あなたは制作管理局に所属し、撮影班との連絡進行を職務としている主任ですから、左右どちらかのドアからお入りになった方がよろしいかと思えます」

「身分職階の自覚はなく、したがってそんな慣例を創造した覚えもなかったのだがな」

「環境は、ほんの一部分でも規定されれば、あとは独立して自己構築を進行させます。あなたの規定と環境の自立。それが対立して軋轢を生む可能性も、大いにあるのです」

「それは、僕に対する警告かね」

「いえ、単なる関係性の話です」

「……」

なにがなし不安を感じつつ、自分は右側のドアを押して、建物内に入ったのだった。入ってすぐは天井の高いホールになっており、そこからシャンデリアがいくつか吊り下げられている。その明るい光の下、しかしなぜか人影はなくしんとしていて、正面の壁には、焦げ茶の両開き木製扉が閉まっている。

その両側はコンクリートの階段であり、手前左右に建物両翼への通路につながるらしい木の扉があつて、これまた閉じられている。

そして、その扉横手の両壁面にはポスター掲示用の装飾木枠が取りつけられており、俳優の顔や、飛行船や、南洋らしき海的情景などが、すべてセピアの濃淡で並んでいた。

自分はそれらを見まわし、さてこれからどう動けばいいのだろうかと考えた。

「まだそこまでは構築できてないらしく、自分の執務する部屋がどこなのかさえ、見当がついてはいないのだがな」

するとそのとき背後に大勢の足音が聞こえ、ふりむくと、灰色の髪をなでつけた小男が老若男女の一団を誘導して、左手のドアからホール内に入ってきたところだった。

「皆さん、ようこそ当映画公社へ」

度の強い眼鏡をかけた彼は、頬に人工的な笑みをたたえ、これまた作られた陽気さでもって、多種多様な相を示す顔に語りかけた。

「あの正面の扉。あれを開けば、その向こうは撮影所につながる構内通路です。あそこをぬけた瞬間から、時代や国籍や、その他もろもろ俗世間の約束事は、どうぞお忘れになって下さい。なぜならそこは、皆さんのために、夢を創造している城なのですから」

「夢というなら、悪夢もあるのかね」

誰かが聞き、小男は高くひきつった笑い声を発して、こちらを顎で示したのである。

「それを決めるのは、私ではありません。そこにいる、ほら、その人なのですよ」

そのあとすぐにか、あるいは何日かのちにか。そのあたりは判然とせぬのだが、自分は執務室で仕事をしていた。

一方の壁には木のドアがあり、その反対側の壁には窓が並んでいる。水平の視線で遠くに空と地の溶融が見えることから考えれば、どうやら一階のどこかであるらしい。その部屋の真中あたりで木製の机に向かい、ペン先を断続的にインク瓶のなかに浸けつつ、書類に数字を書き込んでいたのだった。

「なぜ文字ではなく、数字なのか。それは多分、俺がこの世界の文字を知らず、数字ならばどこでも共通だと思ったからだろう」

なぜならそのとき気づいたのだが、机の隅に重ねられたパンフレットや壁に張られたポスター等、写真や絵はわかるのだけれど、そこに印刷された文字が少しも理解できない。

変形されたアルファベットのようにも見えるが、まったく別体系の記号とも感じられる。0や4や8など、数字のみが形と意味とを明確に示しているのである。

「しかしあの門衛は、俺がさらなる過去にまで遡ってこの世界をつくり、環境を構築したのだと言っていた。とすれば俺はいままで、この理解できぬ文字を操って仕事をしてきたという理屈になるのだが、そんなことが可能なのだろうか。しかも、それをもって良好な評価を受けるなどということが」

自分は疑問を抱き、それに対する説明もしくは解答を求めるべく周囲に意識を向けて、その結果こういうことを知っていた。

「そうか。俺にも第三者にも、この文字はとりあえずまだ、理解できないのだな。彼らは皆、俺の主観的環境構築作業によって出現し、もっか仕事である姿を示している存在に過ぎないのだから」

そう広くもない無音の室内に、木製の机がいくつか固められ、そのそれぞれに同僚の職員らしき男女が向かっている。向かつてはいるのだが、ある瞬間で停止している。ホワイト・シャツに蝶ネクタイ姿で書類をめくりかけている者がおり、袖に黒のカバ